

アメリカと大西洋世界

アメリカ像の環大西洋的構築を目指して

研究目的 アメリカ合衆国の社会、文化、歴史に環大西洋的観点から多角的にアプローチし、新たなアメリカ像を構築する。人、もの、情報の環大西洋交流により越境的に海を渡った文化、宗教、経済、思想、芸術、スポーツ等が「アメリカ」という場を経ることによってどのように変容し、環大西洋／太平洋交流を通して各地で受容されていったかを検証、アメリカ研究の現代的意義を追求する。

研究計画 まず大西洋を中心とした交流史を基軸として相対的観点からアメリカをとらえ直す作業を行う。環大西洋研究のパースペクティヴを導入し、植民地時代より今日までアメリカが大西洋の中でどのように位置づけられ、またどのような役割を果たしてきたのか、地域の文化、思想、経済交流関係から浮かびあがるアメリカ像を分析する。初期段階においては、学内研究者による共同研究とするが、一定の研究基盤を築いたところで、国際的研究体制を取る。さらに、この試みは環太平洋的視点からの研究へと展開するものであるが、まず現段階においては大西洋世界を中心とする。

研究体制 多角的なアプローチを目指すため、超領域的共同研究体制を組む。研究分担者は各自の個別研究テーマを追求しつつ、環大西洋交流の中から「アメリカ」を経て醸成された様々な文化的特性がさらに同じく環大西洋世界でどのように受容されていくかを共通軸として連携する研究を行う。

2011～2013年度学内共同研究

研究代表者：増井志津代

経済

(上山隆大・経済学科)

19世紀アメリカにおけるTherapeutic cultureがヨーロッパの都市文化にどのような影響を与えたのか、特に消費文化とマーケットの関係に着目しつつ環大西洋交流史を検証する。

宗教

(増井志津代・英文学科)

カルヴァン派の環大西洋宗教ディアスポラに着目しつつ、初期アメリカにおける宗教移民グループと母国との交流ネットワークにおける影響関係を探る。

文学

(大塚寿郎・英文学科)

19世紀アメリカン・ルネサンス期から世紀転換期にかけてのcosmopolitanism言説形成と変容に着目し、環大西洋の人・もの・思想の交流がどのように影響したかを検証。

「アメリカ」という場を経ることにより生起する変容

大西洋・太平洋世界におけるアメリカ文化・思想受容

芸術

(永井敦子・フランス文学科)

フランスで活動した作家・芸術家たちの第二次世界大戦期の渡米経験が、戦後、彼らの創作や作品のアメリカでの受容にどのような影響を及ぼしたかを探る。

スポーツ

(小塩和人・英語学科)

19世紀を中心に、ヨーロッパのフットボールがアメリカで変容した過程を分析。さらに、アメリカ化したスポーツが日本を含め諸国でどのように受容されたのかを考察することで、環大西洋・太平洋における文化の越境を思索する。

文化

(小川公代・英語学科)

ヨーロッパ映画とアメリカ映画における「身体」、「ジェンダー」、「情動」の表象を分析することにより、環大西洋におけるフェミニズム思想(文学作品、映画論を含む)がどのような影響を及ぼしたかを検証する。

海外研究協力者

David D. Hall,
David Armitage,
Joyce Chaplin
(Harvard University)